



《教育長メッセージ 第 61 号》

『子どもの安全』

テレビでの自然動物ものの映像は、人気が高く、子どもの頃、よく「野生の王国」を見ていました。今でも、自然動物の生態を捉えた貴重な映像が流れています。

そんな映像の中に、動物たちの子育ての様子があり、そこには、必死に外敵から子どもを守る親の姿があります。

群れで生活する動物たちは、親どうし協力して、我が子だけでなく群れの子どもたちを守る姿が映し出されます。

人間と動物たちを同じに考えることはできませんが、私は、高度な社会性を持たない動物たちの生活でも、子どもを守るのは親の責任、大人の責任であり、それは人間となにも変わらないと思うのです。

そして、むしろ、動物たちの方が、社会のシステムが高度化していない分、子どもの命を守るということに直接的で、学ばされることがあるように思うのですがいかがでしょうか。

さて、昨年度末、三月に、千葉県で、一年間の終わりの修了式の朝に、登校中の女子児童が行方不明になり、その後、遺体で発見されるという痛ましい事件が起こりました。

また、登校する子どもの列に車両が突っ込むというような悲惨な事故が後を絶ちません。

その度に、それぞれの事件や事故の原因究明がなされ、その対応策を講じられますが、それでも、大切な子どもたちの命を脅かす行為が繰り返されてしまいます。

平成13年の大阪教育大学附属池田小学校での、不審者による子どもや教員の殺傷事件は、社会に大きな衝撃を与えました。

誰もが学校は安全な場所だと思っていました。まさか、不審者が侵入して事件を起こすということは想定していなかったのです。

その頃すでに、欧米では、日常的に、通学は保護者の責任で、車などで送迎し、校門には警備の人が立っているという状況でしたが、日本の学校では、ほとんどの子どもが家から学校まで自分で通っていました。そして、集団登校や地域の見守りなどが行われるようになりましたが、それは今で

も同じです。

海老名市では、事件なった翌年に、文部科学省の指定を受け、有馬地区で学校の安全について取組を始めました。

学校には、不審者の侵入に対する道具や防犯カメラなどが設置され、教職員が不審者に対応する訓練を受けました。また、各小学校には、安全監視員が配置され、校門が閉じられるようになりました。

しかしながら、保護者や地域の方々と子どもの安全を話し合う中で、学校に不審者が侵入できないような対策とともに、学校を取り巻く地域の安全が図られる必要があるのではないか、地域が安全なら学校も安全で、登下校や家庭での子どもの生活の安全が重要ではないかという結論になりました。

地域での、日頃の子どもの見守りや声かけが見直され、顔の見える関係をつくるために、あいさつ運動が行われるようになりました。

確かに、私が子どもの頃は、田舎で人も少なかったけれど、地域住民はみんな顔見知りで、イタズラをすると、名前を呼ばれなくても〇〇さん家の子どもと叱られました。

また、学校の行き帰り、今のような登校班はありませんでしたが、地域の子どもの声を掛かっていっしょに学校に通いました。小さい子どもを持つ保護者は、上級生本人やその家庭に、いっしょに学校まで連れて行ってお願いしていました。

子どもの安全が脅かされる事件が起きるたびに、社会は大騒ぎして、家庭、学校、地域、行政などの責任を問います。

私は、原因を究明して対応策を改善する喫緊の対応は大前提として、今後、子どもの安全について、家庭、学校、地域、行政等との話し合いを進めたいと考えています。

身を挺して外敵から子どもを守る動物たちの姿に学んで、真剣に話し合い、大人たちで力を合わせて、子どもの安全に取り組みたいと思うのです。

次回は、「支援教育」について、私の考えを述べてみたいと思います。